

日本語と朝鮮語における姿勢動詞の対照研究(2)

深 見 兼 孝

1. はじめに

深見(2015)では、日本語と朝鮮語の姿勢動詞(*posture verb*)タツと *seta*、スワルと *ancta* の意味を、人間主体の場合に限って、主に動態的側面(cf. Newman 2002)から対照考察することを目的とし、資料として日本語で書かれた小説、朝鮮語で書かれた小説および互いの言語への翻訳を使い、翻訳の様相を数量的な面と訳語の面から考察した。本稿は同じ資料を使って、翻訳の実例を分析することで、深見(2015)を検証することを目的とする。「一形」、「一形式」などの用語は深見(2015)を踏襲する¹⁾。

深見(2015)の主張を要約すれば、(1) 本来タツ、スワルに比べ *seta*、*ancta* は静的で姿勢の制御性が弱い、あるいは制御性とは関係のない意味を持っていると考えてもよい(cf. 北嶋 1977、Song Jae Jung 2002)、(2) 接続形と終止形は姿勢の変化を表すという点で一致し、連体形と接続形は姿勢変化の結果の局面を表すという点で一致していると思われる、となる。それぞれの動詞の、それぞれの形(単一形式における終止形、連体形、接続形)において辞書的意味として対応しない訳語から、*seta*、*ancta* が制御性とは関係のない意味を持ちうることは十分窺えた。そこで、それぞれの動詞のそれぞれの形において、どのような条件で結果状態の形式に翻訳されたり、削除されたりするかを探ることで、(1)の朝鮮語の姿勢動詞の制御性の弱さと(2)を検証する。なお、連体形は実質名詞と固有名詞を修飾している場合のみを取り上げる。

2. 終止形

2-1 タツと *seta*

タツだけに結果状態を表す形式に訳された例があった。日本語原文(1a)は順次的な出来事(花が開いた>女が立った)を述べているのに対し、訳文(1b)では *yeca-ka se iss-ess-ta* (女が立っていた)というのは、作中人物の気づきである。(2a)は作中人物が自らの行動を客観的に描写しているのに対し、訳文(2b)は作中人物自らが気がつくとき *entek ipkwu-ey se iss-ess-ta* (坂の入り口に立っていた)という、やはり作中人物の気づきを表している。(1)も(2)も原文と訳文では描写の視点が違っているが、このうち、(1a)では「女」は立った姿勢で闇の中から現れたと解釈できる。それが

(1b)で結果状態の形式に翻訳されたということは、seta はそのような動的事態を表すのに適していないと考えられる。少なくとも、(1)はタツ seta の意味の違いを反映していると言えるだろう。

(1a) ふうわりと、闇の中にその花がふくらんで、青い唐衣裳を着た女がそこに立った。(陰陽)

(1b) etwum sok-eyse ku kkoch-i salccak pwuphwule olu-teni, phalan tanguy-lul ipun
闇 中-所 その 花-主 ぱっと 膨れ上がる-接 青い 唐衣-対 着た
yeca-ka ku kos-ey se iss-ess-ta.

女-主 その 場所-所 SE-結果状態-過去-終

(2a) 眩暈坂下、つまり墓の町を囲う油土塀で仕切られた坂の入り口に私は立った。(姑獲鳥)

(2b) na-nun hyenkicung entek alay, cuk myocimaul-ul twullessa-ko issnun hulktam-i
私-話 めまい 坂 下 すなわち 墓の町-対 囲む-継続 土塀-主

kwuhoyk-ul cis-ko issnun entek ipkwu-ey se iss-ess-ta.

区画-対 作る-継続 坂 入り口-所 SE-結果状態-過去-終

2-2 スワルと ancta

ancta だけに結果状態の形式への翻訳と削除の例が見られた。(3)は結果状態の形式への翻訳であるが、手持ちのデータにはこの例しか見当たらない。ここは小説の冒頭部分である。居間という設定で、登場人物の容貌や配置など、これから展開する物語の背景を述べたものである。日本語としては結果状態の表現が適している。スワルと ancta の意味の違いを反映したものではないだろう。

(3a) cengay-nun siapeci-uy han phal-ul pwuchwukha-ko anc-ass-ko yenghuy-nun
[人名]-話 舅-冠 一つの 腕-対 支える-接 座る-過去-接 [人名]-話
yeph-ey han son-ulo thek-ul patchi-ko anc-ass-ta. (寝)

横-所 一つの 手-具 顎-対 支える-接 ANC-過去-終

(3b) 貞愛はしゅうとの片腕を支えて座り、英姫は横で頬杖をついて座っていた。

(4)は削除の例である。事務室の場面なので、cali-lo tolao-(ta)(席に戻る)の次を取る姿勢は、特別な状況がなければ、「座る」であろう。しかし、原文で ancta が現れ、翻訳でそれが削除されているところから見て、この ancta は姿勢の変化を表しているのではなく、席に戻った後の姿勢面での最終的な状態を表していると考えられる。姿勢の変化は特別な事情がない限り自明だからである。一方翻訳にスワルが使われていないのは、スワルが姿勢の変化を表し、このように座るのが自明な状況を表現するのに適さないからではないかと考えられる。

(4a) chelho-nun ttukewun chascong-ul sonkalak-ulo kkocipe tul-ko cosim cosim

[人名]-話 熱い 湯のみ茶碗-対 指-具 摘んで持つ-接 注意して
caki cali-lo tolawa (<tolao-a) anc-ass-ta. (誤)

自分の席-方 帰る-接 ANC-過去-終

(4b) 哲浩は熱い茶わんを指先で持って、注意深く席に戻った。

2-3 まとめ

終止形ではタツと ancta が結果状態の形式に翻訳され、また ancta には削除の例もあった。このうち、タツの結果状態の形式への翻訳がタツと seta の意味の違い²⁾を、ancta の削除がスワルと ancta の意味の違いを反映している。

3. 接続形

3-1 タツと seta

タツテが結果状態の形式に翻訳された例と削除の例があった。(5)は結果状態の形式に翻訳された例である。この例で状況として「立った」状態は次の行動「見かける」に重なる。日本語原文で「見かける」時も「立った」状態が維持されていると理解できるが、立つ前提としてそこに移動することも含んでいる。しかし、訳文では「見かける」前に「立った」状態がしばらく続いたようになっている。seta はそのような移動の意味を含まないと思われる。

(5a) ところで、この夜現場に最後に臨場したのは東京地検の担当検事だったのだが、この到着を、二〇二三号室の葛西美枝子が、ウエストタワーのエントランスホールに立って、たまたま見かけていた。(理由)

(5b) i hanpamwung-uy hyencang-ey macimakulo tochakhan kes-un tokhyocikem-uy
この 夜中-冠 現場-所 最後に 到着した の-話 東京地検-冠
tamtang kemsayessnuntey, machim 2023ho-uy kasai michikho-ka weysuthuthawe-uy
担当 検事だったが ちょうど 2023 号-冠 [人名]-主 ウェストタワー-冠
hyenkwanhol-ey se iss-taka kemsaka tochakhanun cangmyen-ul
エントランスホール-所 SE 結果状態-転換 検事-主 到着する 場面-対
chyetapo-ko iss-ess-ta.
見つめる-継続-過去-終

(6)は削除の例である。通常「呼び鈴」を押すときの姿勢は立った姿勢であろう。「立って」は不要とされたのだと考えられる。また、タチも削除が例もあった(7)。この例は食事のできごとを描写しているが、食事の中に「食卓」から「台所」へ移動するのに「食卓」を立つのは自明なことである。翻訳で削除されているのはそのためであろう。このようにタツの削除の例は、タツと seta の意味の違いを反映しているわけではないようである。

(6a) 首筋に流れる汗を拭いながら、玄関に立って呼びりんを押すと、シルクタッチのしゃりつとしたスーツを着た若い女が出て来た。(高層)

(6b) maktelmi-lul hulunun ttam-ul takk-umye hyenkwan-eyse choincong-ul nwulu-ca,
首筋-対 流れる 汗-対 拭く-接 玄関-所 呼び鈴-対 押す-接
silkhu-lo toyn malsswukhan syuthu-lul ipun celmun yeca-ka nawass-ta.
シルク-具 できた さっぱりした スーツ-対 来た 若い 女-主 出てくる過去-終

(7a) 榎本氏は苦い顔をするし、榎本夫人はフォークとナイフを置いて食卓を立ち、台所の方へ行っちゃった。(唯野)

(7b) eynomotho ssi-nun ilkulecin elkwul-ul ha-ko, eynomotho pwuin-un phokhu-wa
[人名] 氏-話 歪んだ 顔-対 する-接 [人名] 夫人-話 フォーク-並
naiphu-lul noh-ko sikthak-eyse cwupang-ulo kapelyess-ta.
ナイフ-対 置く-接 食卓-所 厨房-方 行ってしまう過去-終

seta は削除の例のみあった。sese の形のとき、二つ理由がありそうである。一つは「立つ」姿勢をとることが自明だと考えられる場合である。(8)では changka (窓辺)で外を見るのだから、いすでもない限り立っているしかないだろう。

(8a) hansensayng-un chang ka-ey sese songsensayng-i salacyekan kyomwun ccok-ul
 韓先生-話 窓 ほとり-所 SE-接 宋先生-主 消えた 校門 方-対
 hayemepsi naytapo-ko iss-ess-ta. (江)
 むなしく 外を見る-継続-過去-終

(8b) 韓先生は窓辺で宋先生の立ち去った校門のほうをやるせなく見下ろしていた。

もう一つは、seta が動作の結果としての姿勢の場合である。(9)では salamtul(人々)の動作 moi(+ta)(集まる)はこの前後の状況から歩いて集まる、つまり姿勢としては立った姿勢である。seta は「集まった」あとの姿勢の面での結果を表しているのみで、姿勢を変化することも維持することも表していない。実質的意味は薄くなっていると言えよう。これに比べ、日本語のタツは、姿勢の変化の意味が明確であると言える。そのために seta は日本語訳で削除しているのだろう。(10)では seta は動詞の-ko の形に続いているが、やはり eywessata(取り囲む)の結果である。

(9a) salamtul-un yekiceki moye (<moi-e) sese ayto-uy hanswum-ul nayswie ka-mye
 人々-話 あちこち 集まる-接 SE-接 哀悼-冠 ため息-対 つく-接
 swukunkelyess-ko, (壓)
 囁く-過去-接

(9b) 人々はあちらこちらに寄り集まって哀悼の歎息をもらしながら囁きあっており、

(10a) ku yeca-ka michin salamilan kes-ul al swu issnun kes-un swimepsi kwulli-ko
 その 女-主 狂った人だということ-対 知ることができるの-話 休みなく 回す-継続
 issnun nwuntongca-wa ku yeca-lul eywessa-ko sese senhaphum-ul ha-mye ku yeca-lul
 瞳-並 その 女-対 取り囲む-接 SE-接 生あくび-対する-接 その 女-対
 nollye tay-ko issnun kwutwutakki aitul ttaymwuniess-ta. (霧津)
 からかう-継続 靴磨き 子供たち ためだった-終

(10b) 10404 その女が狂っているのが分かったのは、休みなく動かしている瞳と彼女を取り囲んで生あくびをしながらからかっている靴磨きの子どもたちのためだった。

se-myense の形のときも削除の例があった。(11)で chang(窓)の通常の高さから考えて、chang-ka-ey phalkkwumchi-lul ciph-(ta)(窓辺に肘をつく)のは立った姿勢であろう。すなわち、立つのは前の動作の結果とは言えないものの、その動作をするときは立っていると解釈するのがもっとも自然である。seta はその前の動作と重なっている姿勢であり、いわば付随的で、結果としての姿勢と同程度に実質的意味は薄いと言えよう。

(11a) thisyeechu-lo kalaipun ku-nun sengkhum-sengkhum nay pang-ulo amwulehkeyna
 Tシャツ-具 着替えた 彼-話 ずかずかと 私の 部屋-方 無造作に
 anlakuyca-ey cwuceanc-tunka, changka-ey phalkkwumchi-lul ciph-ko se-myense
 安楽椅子-所 座り込む-選択 窓辺-所 肘-対 つく-接 SE-接
 na-eykey wusepoi-nta. (畚)
 私-与 笑ってみせる-終

(11b) T シャツに着替えた彼はずかずかと私の部屋に入って来て無造に安楽椅子に身を投げるか、あるいは窓ぎわに肘を突いて私に笑いかける。

以上、タツが結果状態の形式に翻訳されているときは、seta の単一形式では姿勢の変化や移動が明確でないため、原文の意味を結果状態の意味に置き換えたものと思われる。従って、この場

合はタツの表す姿勢変化の局面を避け、結果の局面に頼った翻訳と言える。削除のときは、タツの次の動詞の表す動作をするためには立つことが自明だと思われる。一方、seta は削除の例だけがみられ、前の動作の結果か付随的な姿勢であった。これは、タツで翻訳するとタツの姿勢変化の側面が強出過ぎると感じられた結果である。

3-2 スワルと ancta

スワツに結果状態の形式への翻訳が見える。まず、(12)では原文の「彼女の話を知っているところ」が翻訳されていない。「Aさんの夫」が「彼女の話を知っている」とき座った姿勢を取っている。前後から「Aさんの夫」が何をしているのか分かるので翻訳されていないものと思われるが、その間座った姿勢が続いているので、結果状態の形式に翻訳されているのだろう。おそらく、スワルと ancta の意味の違いが反映しているのではないだろう。

(12a) Aさんの妻は、夫が脇に座って彼女の話を知っているところで、一気にこうまくしたてた。(理由)

(12b) A ssi-uy pwuin-un namphyen-i yeph-ey anc-a iss-nunteyto ilehke tanswumey
 Aさん-冠 夫人-話 夫-主 横-所 ANC-結果状態-逆接 このように一息に
 malhaypelyess-ta.

言ってしまう過去-終

ancta は、anc-a の形るとき削除の例が見える。これも次の(13)のように ancta の次の行動は座った姿勢のままであることが自明である場合と、(14)のように ancta がその前の動作の結果である場合とがあった。(13)で phemphuka (ポンプのそば)で ssal-ul ssis(-ta) (米を洗う)のであれば、それは座った姿勢であるのは自明である。また、(14)では、座った姿勢は mwuluph-ul kkwulh(-ta) (膝をつく)の結果である。anc-umye の形るとき削除の例が見える。やはり(15)では次の動作に移るとき座る姿勢を取るのが自明である。

(13a) emeni-nun phemphuka-ey anc-a polissal-ul ssis-ta mal-ko pwuekh-ulo tulekass-ta.
 母-話 ポンプのそば-所 ANC-接 妻-対 洗う-転換 やめる-接 台所-方 入る過去-終
 (神)

(13b) 母はポンプのそばで妻をといていた手をとめ、台所にはいりこんでしまった。

(14a) sanai-nun pawi cantung-ey mwuluph-ul kkwulh-ko anc-a naysmwul-ey son-ul
 男-話 岩 背-所 膝-対 つく-接 ANC-接 川の水-所 手-対
 ssis-nunta. (誤)

洗う-終

(14b) 男は岩の背に膝をついて川の流れに手を洗う。

(15a) chelho-uy anay-nun ilena anc-umye elinkes-ul ana ilukhyess-ta. kwusek-eyse
 [人名]-冠 妻-話 起きて ANC-接 子供-対 抱いて起こす過去-終 隅-所
 khangthong-ul kkuleta taye cwuess-ta. (誤)

缶-対 引き当ててやる過去-終

(15b) 哲浩の妻は起き上がって子供を抱き起こして、部屋の隅にある罐詰の空罐におしっこをさせた。

anc-ase の形のときも削除の例が見えるが、翻訳では姿勢が変化したという解釈を成立させる動詞がない。座った姿勢であることは、描写されている状況から解釈できる。次の(16b)では「時間を過ごす」(sikan-ul ponay(+ta))ときの姿勢はいろいろあるが、「診察を受けにきた患者のように」(cinchal-ul pat-ulo on hwanca-chelem)であるので、待合室のソファか椅子に座っているのだと解釈できる。これは日本語表現の状況依存性を表れだとも言えるが、それだけスワルは ancta に比べて姿勢の変化ないし維持の意味が強いのであろう³⁾。

(16a) kuliko nase-nun cinchal-ul pat-ule on hwanca-chelem malepsi wutwukheni anc-ase
 そうし終える-接-強 診察-対 受ける-目 来た 患者-似 黙って ぼんやり ANC-接
 sikan-ul ponaynun kesita. (剩)
 時間-対 送るのだ

(16b) それが済むと、診療を待つ患者のように、ことばもなく、ただぼんやりと時間を過ごすのである。

3-3 まとめ

接続形では、タツとスワルに結果状態の形式への翻訳の例があり、タツには削除の例もあった。一方、seta と ancta は削除の例が見られた。このうち、タツの削除とスワルの結果状態の形式への翻訳を除いて、タツと seta、スワルと ancta の意味の違いを反映していると思われる。

4. 連体形

4-1 タツと seta

タツの形で結果状態の形式への翻訳、タツタの形で結果状態の形式への翻訳と削除の例が見える。まず、結果状態の形式への翻訳である。(17)のタツはそのまま連体形で姿勢の維持を表すと解釈できる。翻訳ではその継続を表したものと考えられる。しかし、(18)の原文の「庭に立った」は(女の)過去の行為しか意味しない。これを結果状態の形式に翻訳するのは、その動的な事態を seta が表しにくいせいであろう。

(17a) 短編集を手にして書店の通路に並ぶサイン希望者の列は、傍に立つ番場が唯野の存在を教えるために大声をはりあげるほどのこともなく、なかなか途切れなかった。(唯野)

(17b) tanphyencip-ul son-ey tul-ko secem thonglo-ey nulesen sain huymangca-uy
 短編集-対 手-所 持つ-接 書店 通路-所 並んだ サイン 希望者-冠
 haynglyel-un yeph-ey se iss-nun panpa-ka tatano-uy concay-lul alli-ki
 行列-話 横-所 SE結果状態-連体 [人名]-主 [人名]-冠 存在-対 知らせる-名
 wihay khunsoli-lo ttetuletay-l kes-to epsi kyeysoktoy-ess-ta.
 ために 大声-具 さわぐ-連体 こと-強 続く-過去-終

(18a) 昼、明智が来たと言って、庭に立った女である。(陰陽)

(18b) nac-ey myochi-ka wass-tako malha-mye cengwen-ey se iss-ten yecata.
 昼-所 [人名]-主 来る過去-引 言う-接 庭-所 SE結果状態-連体 女だ

(19)は削除の例であるが、「吉野文子」は外部から「3041 号室」を訪ねて来たことになっている。「吉野文子」は「扉の前」にいるので、ここのタツは結果の意味を持つ、と同時にタツは移動の意味

も含んでいるとみなすのが妥当であろう。上でも述べたように seta は移動の概念を含まないので、削除した上で「スチール扉の前」は「緊張をなだめる」「コールボタンを押す」という動作を行った場所として翻訳されたと考えられる。削除しても「吉野文子」が「扉の前」にいるという解釈に変わりはない。

(19a) 金箔をまぶした 3401 号室の荘重なスチール扉の前へ立った吉野文子は、二、三度深呼吸をして緊張をなだめてから、コールボタンを軽く押した。(高層)

(19b) kumpak-i chanlanhan 3041 hosil-uy cangcunghan mwun aph-eyse

金箔-主 きらめく 3014 号室-冠 荘重な 門 前-所

yosino hwumikho-nun twusey pen simhohup-ul han hwu kincang-ul nwulu-mye

人名-話 二三 回 深呼吸-対 した 後 緊張-対 抑える-接

choincong pethun-ul kapyep-key nwulless-ta.

呼び鈴 ボタン-対 軽い-副 押す-過去-終

seta は se-n と sess(<se-ess)-ten の形で結果状態の形式への翻訳例が見える。n も-ess も完了の意味があり、(20)では son-ul cap-ass-ta(手を握った)とき、(21)では yepkwuli-lul milenay(-ta)(脇を押す)とき、立っているという結果状態が継続していると解釈される。それを生かしての日本語訳であろう。

(20a) kulemyenseto na-nun kwulum-i kkie issnun hanul mith-uy pata-lo ppetun

そうでありながらも 私-話 雲-主 かかっている 空 下-冠 海-方 延びた

pangcwuk wi-lul keleka-myense tasi nay kyeth-ey se-n yeca-uy son-ul cap-ass-ta. (霧津)

堤防 上-対 歩く-接 また 私の 側-所 SE-連体 女-冠 手-対 取る-過去-終

(20b) それでいて、私は雲のかかった空の下の海にのびた堤の上を歩きながら、また脇に立っている女の手を握った。

(21a) kulena yohayng han salam-i ppacye naonun thum-ul thase ekkay-lul tulimil-myen

しかし 幸い 一人の 人-主 抜ける 隙-対 つく-接 肩-対 入れる-条件

enusay ttwietul-ess-nunci yeph-ey sess(se-ess)-ten acwumeni-ka phalkwup-ulo 東周-uy

いつの間に 飛び込む-過去-疑 横-所 SE-過去-連体 おばさん-主 ひじ-具 人名-冠

yepkwuli-lul milenay-nun kesita. (生)

脇-対 押す-連体 のだ

(21b) 幸いひとりがどいた隙に乗じて肩をこじ入れると、いつの間に飛び込んだのか脇に立っていた女が肘で東周の脇腹を押しつけるのだ。

4-2 スワルと ancta

スワルとスワッタのどちらにも削除の例が見える⁴⁾。(22)は教室の場面であるが、翻訳者にとってスワルは余計だと思われたのであろう。教室で「席」と言えば「座る」所だからである。

(22a) でも、せめてもの救いは、みんなの座る席が決まっていないことだった。(トット)

(22b) kunama aitul-uy cali-ka han kwuntey-lo cenghaycye iss-ci anh-a tahayi-ess-ta.

それでも 子供たち-冠 席-主 一つの 所-具 決まる-結果状態-否定-接 幸運だ-過去-終

ancta は anc-ass-ten の形のとき結果状態の形式への翻訳例が、anc-nun の形のとき削除の例が、anc-un とき両方の例が見える。(23)と(24)は結果状態の形式への翻訳である。これらの例の

anc-un, anc-ass-ten も-un, -ass-を含んでおり、結果状態の意味を汲んでの翻訳だと思われる。

(23a) kulena cikum chelho-uy aph-ey ccwukuliko anc-un anay-nun ku ttay-uy
しかし 今 [人名]-冠 前-所 手足を折り曲げて ANC-連体 妻-話 その時-冠
kunye-ka ani-ess-ta. (誤)

彼女-否定-過去-終

(23b) いま、哲浩の前に坐っている妻は、すでにその彼女ではない。

(24a) yeph-ey anc-ass-ten cena-ka koyihan oymati soli-lul cilu-mye nay mwuluph wi-ey
傍ら-所 ANC-過去-連体 [人名]-主 奇怪な 叫び声-対 上げる-接 私の 膝 上-所
ssulecye wass-ta. (感情)

倒れてくる-過去-終

(24b) 傍に坐っていた典娥が、奇妙な叫び声をあげながら、僕の膝に崩折れた。

次に削除の例である。(25)では ancta は先行する動詞 ka(-ta)(行く)、(26)では kitay(-ta)(寄りかかる)の表す動作の結果としての姿勢を表す。描写された状況から(25)では「万基」も「万基」に「近寄る」前の「益俊」も同じソファーに座っており、(26)では「英浩」は既に座っていることが分かる。接続形の場合と同様、スワルと ancta の意味の違いを反映していると言える。

(25a) kulehkey kaythanha-ko nase sinmwun-ul phye tul-ko manki kyeth-ulo ka
そのように 感嘆する-完-接 新聞-対 広げ持つ-接 [人名] 側-方 行く-接
anc-nun ikcwun-uy elkwul-un hungpwun-ulo tolo pwulkeci-ki sicakhayss-ta. (剩)
ANC-連体 [人名]-冠 顔-話 興奮-具 またも 赤くなる-名 はじまる-過去-終

(25b) 新聞をひろげながら万基の側に近寄る益俊の顔はまたもや興奮で赤らみはじめた。

(26a) pisutumhi pyek-ey kitay-e anc-un yengho-nun pelkeh-key yel-ey ttun elkwul-ul
斜めに 壁-所 寄りかかる-接 ANC-連体 [人名]-話 赤い-副 熱-所 浮いた 顔-対
ha-ko tampay yenki-lul phwu nayppwum-ess-ta. (誤)

する-接 タバコ 煙-対 ふう 吐き出す-過去-終

(26b) はすかいに壁にもたれた英浩は、酒に火照った赤い顔で、煙草の煙をフウと吐き出した。

4-3 まとめ

連体形では、タツに結果状態の形式への翻訳と削除、スワルに削除の例が見える。一方、seta には結果状態の形式への翻訳、ancta には結果状態の形式への翻訳と削除の例が見える。このうち、タツの結果状態の形式への翻訳と削除の例、および ancta の削除の例が、タツと seta、スワルと ancta の意味の違いを反映していると言える。

5 結論と今後の課題

これまでの例の分析から、タツより seta が、スワルより ancta の方が姿勢の変化や維持、すなわち姿勢の動的側面において意味が希薄であることは疑いないだろう。すなわち、朝鮮語の姿勢動詞は姿勢の制御性について、日本語のそれより弱いと終える。

タツの接続形は、その姿勢変化の後の状態(立っている状態、座っている状態)が続く動作に重なっているよう書き換えられていた(3・1)。また、タツの連体形で削除のものは状況的に結果の局面

が保たれるよう書き換えられていた(4・1)。すなわち、原文の意味は保存されないものの、どちらも姿勢変化の局面を避け、結果の局面に頼った翻訳となっていた。接続形と連体形では、姿勢変化の局面も姿勢変化の結果の局面も意識されやすいと言えよう。その他の「削除」は *seta* と *ancta* の翻訳にしか起こっていない。それぞれ、その姿勢にある、またはその姿勢を取ることが明らかな場合で、姿勢変化の局面が意識された翻訳であった。これはすべての形に見られる。さらに、タツの終止形と連体形(結果状態の形式への翻訳)(2・1, 4・1)も、姿勢変化の局面が意識された翻訳と言える。

姿勢変化の局面、姿勢変化の結果の局面が意識されるということは、それぞれ姿勢変化の意味、姿勢変化の結果の意味が現れやすいと言い換えていいだろう。すなわち、すべての形は姿勢変化の意味が、接続形と連体形は姿勢変化の結果の意味も現れやすいと言える。終止形と連体形の(姿勢変化の局面を表すという意味での)共通性は、当初想定していなかったが、形の違いを超えた共通の意味があるのは当然であろう。終止形と接続形が姿勢の変化を表し、接続形と連体形が姿勢変化の結果の局面を表すという、当初の予想と矛盾しない。

本稿は単一形式としての姿勢動詞とその翻訳しか扱っていない。結果状態の形式もまた、終止、接続、連体の形で現れる。今後は姿勢変化の結果を表す形式に置かれた姿勢動詞とその翻訳の資料を扱わなければならないだろう。

注

1) 朝鮮語は一部簡略化した The Yale Romanization System によって表記し、簡略なグロスを付けた。その略語は以下の通りである。グロスでは *seta* は SE、*ancta* は ANC と表記している。

引: 引用形、完: 完了、冠: 冠形格、強: 強調、具: 具格、似: 類似、主: 主格、終: 終結形、接: 接続形、所: 所格、対: 対格、副: 副詞形、並: 並立、方: 方向格、名: 名詞形、話: 話題

2) 特に言及しない限り、タツの結果状態の形式への翻訳例がすべてタツと *seta* の意味の違いを反映しているということではない。以下同様である。

3) 同様の例は *seta* の *se-se* の形にもあるが、紙面の都合で例は省く。なお、主に英語との対照ではあるが、日本語表現が状況に依存する度合いが高いという指摘は多い。例えば、巻下・瀬戸(1997)参照。

4) スワッタの削除の例には説明できないものもあるが、その事実だけを指摘しておく。

言及した文献

北嶋静江 (1977)「日本語朝鮮語対照言語学の展望」『朝鮮学報』第 85 輯, 1-13.

巻下吉夫・瀬戸賢一(1997)『文化と発想とレトリック』: 中右実(編)『日英語比較選書』1, 研究社出版

深見兼孝(2015)「日本語と朝鮮語における姿勢動詞の対照研究(1)」『ニダバ』44 号, 109-118.

Newman, John(2002) A cross-linguistic overview of the posture verbs 'sit', 'stand', and 'lie'.

In *The Linguistics of Sitting, Standing, and Lying* [Typological Studies in Language 51], John Newman (ed): 1-24. John Benjamins.

Song Jae Jung(2002) The posture verbs in Korean: Basic and extended uses. In *The Linguistics of Sitting, Standing, and Lying* [Typological Studies in Language 51], John Newman (ed): 359-385. John Benjamins.

用例出典

- (姑獲鳥) 京極夏彦『姑獲鳥の夏』講談社文庫、講談社／김소연 『우부메의 여름』 손안의 책.
(陰陽) 夢枕獏『陰陽師飛天ノ巻』文春文庫、文藝春秋／김소연 『음양사 2 비천편』 손안의 책.
(高層) 森村誠一『高層の死角』祥伝社文庫、祥伝社／김수연 『고층의 사각지대』 동서문화사.
(唯野) 筒井康隆『文学部唯野教授』岩波書店／김유근 『다다노 교수의 반란』 문학사상사.
(トット) 黒柳徹子『窓ぎわのトットちゃん』講談社文庫、講談社／김난주 『창가의 토토』 프로메테우스 출판사.
(理由) 宮部みゆき『理由』新潮文庫、新潮社／이규원 『이유』 청어람미디어.
(感情) 韓戊淑 『感情 있는 深淵』. 三中堂文庫 284. 三中堂/感情ある深淵: 現代韓国文学選集-3短編小説 I. 冬樹社
(江) 河瑾燦『기울어지는 江』: 韓國現代文學全集 34. 三省出版社／傾ける河(鴻野映二訳): 韓國の現代文学 3-中編小説 I. 柏書房
(謠) 李浩哲 『닿아지는 살들』: 現代韓國文學全集 30/いらだつ人々(大村益夫訳): 韓国短篇小説選. 岩波書店
(霧津) 金承鉦 『霧津紀行』: 現代韓國文學全集 44. 三省出版社／霧津紀行(張璋吉訳): 韓国短篇小説選. 岩波書店
(生) (孫昌涉) 『生活的』: 現代韓國文學全集 26/生活的(張璋吉訳): 韓国短篇小説選. 岩波書店
(神) 趙世熙 『잘못은 神에게도 있다』: 第三世代韓國文學 2. 三省出版社/過ちは神にも(張璋吉訳): 韓国短篇小説選. 岩波書店
(壓) 金源一 『壓殺』: 韓國現代文學全集 50. 三省出版社/圧殺(張璋吉訳): 韓国短篇小説選. 岩波書店
(誤) 李範宣 『誤發彈』: 現代韓國文學全集 30/誤發彈現代韓国文学選集-3短編小説 I. 冬樹社
(剩) 孫昌涉 『剩餘人間』: 韓國現代文學全集 26. 三省出版社/剩餘人間: 現代韓国文学選集-3短編小説 I. 冬樹社
(畚) 康信哉 『畚은 느티나무』: 韓國現代文學全集 22. 三省出版社/若いけやき: 現代韓国文学選集-3短編小説 I. 冬樹社